

編集・執筆スキルに、心理学の裏付け

私は大学卒業後14年間、健診団体の広報室で編集・執筆を担当していました。取材をもとに一般・医療者向けの記事を書き、レイアウト、校正をする仕事です。その後、米国コロラド州

の大学院で5年かけて安全の心理学（社会／健康心理学の一分野）を学び帰国。以来6年になります。

今は特に、保育現場・行政が子どもの命を守るための具体的な行動に取り組みにはどうすればよいかをテーマにしています。

私の専門分野では、対象集団に働きかけ、意識や行動を変えていくことがゴールです。今の私であれば、「子どもの命を守る」ことが、保育者の心と仕事を守るうえでいかに重要か」を効果的に

にお伝えするコミュニケーションの部分が必要になります。この文章も「より効果的に！」と考えながら書いています。

私にとって「書く」編集する「添削する」という行

動は慣れていて、とっつきやすいもの。そこに「人を動かすため、人に伝えるための心理学」をプラス。そこから始まったのが「園だより、クラスだよりの添削」です。

「読みたい」と思うおたより作りを

今の園だよりやクラスだより、連絡帳に書かれている文章には、伝えたいことが伝わりにくい文章、または、保護者が「読もう」と思えないものが少なくありません。明らかに保護者をいらだたせる文章もあります。長期的に、保護者との関係を悪化させる原因となりかねません。

あなたの園で、園だよりはどんな位置づけですか？「保護者との大事なコミュニケーション」手段のひとつ。この連載はそうお考えになる先生に向けたものです。ぜひ、役立ててください！

美しい文章を書けるようになる必要はありません。園として、保育者として、伝えたいことが伝わるおた

より「保護者が読もうと思えるおたより」を書く。同時に、「保護者に『何、この先生』と思われる内容や書き方」を避ける。これが柱です。コツさえつかめば、たいていの人にできます。

この連載では、私が3年

学びシリーズ28

伝えたいことが伝わるお便り作り①

保育の安全研究・教育センター代表 掛札 逸美

近く続けてきた添削から気づいたことをお伝えしていきます。

ポイント1

主役は「子ども」

あまりにも当たり前のごとです。でも、実は園だよりやクラスだよりを読んでみると、「子ども」「子どもたち」「お子さん(さま)

といった言葉が抜け落ち過ぎていくことに気づきます。日本語は、人称の言葉を選べる言語です。「私はあなたに」してほしい、「英語ならそのまま（want you to do）」となる文章が、日本語だと「どうぞしててください」。私も「あなた」も消えてしまいます。読み手も「誰が」「誰に」「誰を」を補いながら読むことに長けているのです。

でも、保育園から伝える情報で保護者の目をひくのは「子ども」という言葉。「園のお子さんたちが元気に」「今週のさくら組の子どもたち」…保護者は「子ども」という言葉に、保育園で過ごす「我が子」の姿を見るのです。

ポイント1の派生形です。保育者は子どもに呼びかける時、「はい、組さんたち」「組のお友だち」と言います。そして、おたよりにも「今日はををした○○組(さんたち)です」と書きがちです。

せめて、「〇〇組の子どもたちです」にしましょう。園にとっては「組」という集団でも、保護者には「自分の子ども」。十把ひとからげの「組」にされたのでは、「園に自分の子どもがいる」という実感さえ薄れかねません。

保育者にとっては当たり前すぎる「子ども」という言葉。でも、おたよりや連絡帳の中で保護者の目をもっともひくこの言葉をもっと使ってください。

ポイント2

「組さんたち」より「組の子どもたち」

ポイント1の派生形です。保育者は子どもに呼びかける時、「はい、組さんたち」「組のお友だち」と言います。そして、おたよりにも「今日はををした○○組(さんたち)です」と書きがちです。

ポイント2の派生形です。保護者は「子ども」という言葉に、保育園で過ごす「我が子」の姿を見るのです。

ポイント3の派生形です。保護者は「子ども」という言葉に、保育園で過ごす「我が子」の姿を見るのです。

ました。皆さんが預かっていたのは、名前を持った一人ひとりの人間です。

ポイント3

「保護者の皆さん」と呼びかける

これもポイント1の派生形です。これまた保育園にとっては当たり前すぎることで、たとえば「保護者の皆さんのご参加をお待ちしております」と書くべきところを、「ご参加をお待ちしております」だけで済ませるケースが多々あります。

保護者に「子育ては自分ごと」と思ってもらいたい、それなら「保護者の方/皆さん」という言葉も省かずに使いましょう。

コミュニケーションはすべて「相手ありき」です。自分(保育者、園)の視点では当然と思って書いたことが、相手(保護者、地域)に伝わるとは限りません。

めったにありませんが、絶対にやめていただきたいのは、「組」すら入れない表現。実際の事例で、「今日も元気なおんたち」と書かれていた時には絶句し

「子ども(たち)」という言葉をしっかり入れる例
進級から2か月、新しい環境にもすっかり慣れてきました。
→進級から2か月、ひよこ組の子どもたちは、新しい環境にも～

「相手はこの文章をどう解釈するのか」「相手の心にはこの言葉がどう響くのか」を考えて初めて、効果的なコミュニケーションを作ることが出来ます。

書いたら、必ず読み返す

皆さんの園日より、クラスだよりに「子どもたち」保護者の皆さん」といった言葉は増えましたか？ ポイントを意識しながら書くのは難しいもの。書き終わったら必ず読み返し、「ここに『子どもは』と入れたほうがいいな」というふうに考えましょう。

字がぎゅうぎゅう詰めになってしまったお便り…。どんなに良い文章でも、見ただ目で「読みたくない」と思われたら終わりです。では今回、お伝えするポイントは…。

ポイント4 保護者の受け取り やすさを考える

次の例は園の視点で書かれていて、保護者には不親切です。なぜでしょう？

★保育参観の予定です！

- 17日 にじ組、そら組
19日 はな組、ほし組
22日 かぜ組、ゆめ組

ひとつは、保護者が「私の子どもはほし組だから…」19日か」と探さなければいけない点。さらに、たとえばゼロ歳児の第一子を預けている保護者や、他の年齢で途中入園した子どもの保護者にとって、他の組の名前は「？」です。保護者の受け取りやすさ考えるなら、

★保育参観の予定です！

- ゆめ組 (0歳児) 22日
はな組 (1歳児) 19日
かぜ組 (2歳児) 22日
にじ組 (3歳児) 17日
そら組 (4歳児) 17日
ほし組 (5歳児) 19日

伝えたいことが伝わるお便り作り②

保育の安全研究・教育センター代表 掛札逸美

学びシリーズ29

と書くべきです。保護者は自分の子どもの日を見つげやすく、同時に「来年は〇〇組なんだ」と見通しを持つこともできます。予定や行事の持ち物などを知らせる時は必ず、「私が保護者だったら…」という視点で見直してください。この手間をかけることで、

予定の勘違いや忘れ物を減らせるのですから。お便り全体のレイアウトも重要です。予定やお願いはなるべく「か所にまとめましょう。A4用紙を貼るスペースは家庭の冷蔵庫にありません。でも、紙を四つに折った時に予定とお願

いが見える形にレイアウトしておけば、折って冷蔵庫に貼っておいても大丈夫(＝見てもらえる)可能性が上がります。

ポイント5 「してほしいこと」を明確に書く

こういった文章が見受けられます。

- 持ち物すべてに名前を書いてください。薄くなっている物もありますので、確認してください。
●爪が伸びているお子さんがいます。気をつけてください。
●水筒を持たせてください。

こうした文章は、「何を保護者にしてほしいか」があまりです。連絡では「何を、どうしてほしいか」を常に明確に書きましょう。そうしないとすれ違いが起き、「お便り(掲示)ではわからなかった」という苦情にもつながります。

残念ながら、今は「言わなくてもわかるでしょ」は通用しません。

- 持ち物すべてに名前をフルネームで書いてください。薄くなっている物もありますので、すべて書き直してください。
●爪が伸びているお子さんがいます。角を丸く、短く切ってください。
●水筒に水かお茶を入れて、持たせてください。

ポイント6

保護者は「おとな」

お便りでは「子ども向け」の言葉も使われています。

●先日、いるかぐみは、くじらぐみのお友だちと一緒にのみずあそびをしました。

●先日、いるか組の子どもたちは、くじら組の子どもたちと一緒に水遊びをしました。

「お友だち」は、保育者にとっては子どもに対する呼びかけ言葉ですから、お便りでも多く使われます。でも本来、「友だち」は大事な意味を持った言葉。保育園でも年中以降になれば、人間関係の文脈で「友だち」を使うようになります。この大事な言葉を普段つかいしないでください。また、保護者にとっては「お友だちって誰のこと？」。意味があって「友だち」を使う時以外は、「子ども(たち)」で。そして、おとなが読むのですから、適切に漢字を入れて。

● リスク・コミュニケーションの大切さ

「リスク・コミュニケーション」という言葉を聞いたことがおありかと思えます。事業や活動において予測されるリスクと対策について、事前に関係者に伝え、関係者と相互に情報交換をしていく過程を指します。

どんな事業や活動も、価値と同時に必ずリスク、コストを伴います。保育でも、価値だけではなく、そこに伴うリスクもきちんと保護者や地域住民に伝えていくことが大切です。

子どもが集団で元気に過ごす以上、ケガ、かみつきやひっかきなど、保育にはさまざまなリスクがあります。こうしたことについて、も子どもの育ち、保育の価値とあわせて、入園当初や新年度の始まりの時、保護者に伝えましょう。

「起きる前にわざわざ伝える必要はないんじゃない？起きてからちゃんと説明すれば…」と、起きてからでは手遅れです。

例えば、かみつきが何度

か起きた後、かまれた子どもへの保護者に「これは、育ちの中で当然起こることです」と話しても、「なに、言い訳して!」と思われてしまうでしょう。人間は、感情的になっている時に理屈や説明を聞いても納得できず、いっそう感情的になりがちです(心配な時や困っている時なども同様です)。

一方、1歳児進級の時、または0歳児の途中の保護者会がかみつきやひっかきのリスクに先んじてふれ、「成長の過程には当然あることなので、ご理解ください」と言っておけば、冷静な傾向があるのです。

● 感染症について 流行前に伝える

冬の時期、リスク・コミュニケーションで最も重要になるのが、感染症です。

「園でうつされた」「対策はしているのか」と言われる、まだ感染力がある期間なのに、具合が悪いのに預

けてくる…、保護者からの意見や質問も増える時期です。こういう時こそ、流行が始まる前にリスク・コミュニケーションです。園だより、クラスだより、掲示、連絡帳、すべての媒体を総動員しましょう。

学びシリーズ 30

伝えたいことが伝わるお便り作り③

保育の安全研究・教育センター代表
掛 札 逸 美

②ひと目でわかる タイトル

掲示のタイトルを「お願い」や「ご注意」にしていませんか？ これでは保護者の目をひきません。掲示のタイトルも園だよりの見出しも、「ひと目で内容がわかるもの」に。もちろん、大きな文字で。

「〇〇感染症が近隣で流行し始めました」「2人のお子さんが〇〇感染症と診断されました」「今週の感染症情報」など、タイトルを見ただけで、内容がパッと見てわかること。予防や対策に熱心で保育園に協力的な保護者なら、このひと言だけでメッセージを受けとってくれるでしょう。

③自園の取り組みを伝える

タイトルの下に事実(例: 〇〇感染症が流行し始めました)をひと言書いたら、すぐに自園の取り組みです。これが、保育園に対する保護者の信頼を高める鍵です。

「うちの子の園は、こんな予防対策をしているんだ」と保護者がわかること。保護者の心に「安心」をつくる

④保護者に してほしいことを、具体的に

自園の取り組みを書かないまま、保護者に「ああして」「こうして」と書くと、「上から目線で命令をされている」という印象を残します。だから、自園の取り組みが先。その後に、保護者がすべきことを書いてください。

ただ、保育園として最も伝えたいのはここです。自園の取り組みよりも字のサイズを大きくする、赤字にする、枠で囲うなどして目立たせましょう。

⑤「質問はいつでも」

ここで紙面に余裕があれば、感染症の解説を書いて

もかまいませんが、なくとも問題ありません。「え、どんな病気？」と思った保護者はインターネットで調べられるでしょうし、そもそも関心がない保護者は、解説を書いたところで読まないからです(解説を書く場合は、引用元を明記すること)。

解説を「ごちゃごちゃと書いて読みにくくするくらいなら、③と④がしっかり目立つよう、全体のレイアウトを余裕のあるもの、目立つべき点が目立つものにしてください。

そして、最後は「ご意見やご質問がありましたら、いつでも園長、担任までお声がけください」。これは、「私たちの園は、いつでも保護者の皆さんの声を聞きます。なんでも話してください」という態度表明ですから、書き忘れないようにしてください。

おまけ: 園内コミュニケーションも「風通し良く」して、保護者から何を尋ねられても一貫した答えが返せるようにしましょう!

●「睡眠時の安全」を

しっかり伝えて

新入園の季節ですね。

この時期は、これから1年間の保育活動について保護者にも見通しをもってもらい、「保育の大切さ」と同時に「集団で子どもたちが育つからこそ起こるリスク」も理解していただくべき時です。前回お伝えしたリスク・コミュニケーションがとても大切です。

特に今、必要なのは0歳児、1歳児等の睡眠中の安全の取り組みを保護者にしっかり伝えることです。乳児は睡眠中に突然亡くなる場合があります。このメカニズムもほとんどわかっていません。ただ、一定の確率で必ず起こりますから、乳児を預かる施設では「私たちの所でも起こりうる」と考えて予防に取り組んでください。「私たちが預かっている子どもたちは大丈夫」はありません。

「私たちが預かっている子どもたちは大丈夫」はありません。

「私たちが預かっている子どもたちは大丈夫」はありません。

●リスク・コミュニケーションの

次のようになります

①リスクの認識

たとえば、厚生労働省が出しているSIDS予防のリーフレットを印刷して渡すだけで、「私たちの園は突然死のリスクをちゃんと認識しています」というメッセージになります。「そんなことをしたら寝た子を起すだけ。保護者がよけいに心配する」とおっしゃる方もいますが、保育現場の安全に社会の注目が集まっている今、「うちの子を預ける園は大丈夫？」と思っている保護者は少なくありません。何も言わなければ「大丈夫なのかな」と不安が増幅します。

②自園の取り組み

「睡眠中のリスクを下げるため、私たちは寝かしつけからあおむけ寝にしています」「あおむけ寝でもリスクをゼロにすることはできませんから、5分(10分、15分)ごとに呼吸のチェックをしています」と自園の取り組みを書いて、たとえば①のリーフレットにつけて渡しましょう。

③「ご家庭でも」の一言を

これはリスク・コミュニケーションではありません

が、せっかく厚労省などの情報を渡すのですから、「ご家庭でも、寝かしつけからあおむけ寝にしてあげてください」とひと言、書き添えましょう。「教えてもらった」という気持ちになる保護者もいるはずです。

学びシリーズ31

伝えたいことが伝わるお便り作り④

保育の安全研究・教育センター代表 掛札逸美

●「社会的責任を果たしている」というメッセージ

「0歳児は突然死をする」ともあるのだから、園で亡くなってもしかたない、確かにそうかもしれない。「寝返りがうてるようになれ

ば、うつぶせ寝になった子どもをあおむけにひっくり返す必要もない。園の午睡チェックも必要ない」という意見も医療の中にはあります。けれども、「他人の子どもを命を預かる施設」が「0歳児は亡くなることもあるのですから」「寝返りをうてるので大丈夫と判断しました」と言って社会的責任を逃れられるでしょうか？

「子どもの育ちにとって、小さな事故やケガは必要です。でも、私たちは命をしっかり守る努力をしています」と保護者に、そして、社会に伝えることが、今一番、大切です。そうしなければ、保育園で働く人たちの心と仕事は守れません。

●4月の園だよりやクラスだより

しがちな間違い

リスク・コミュニケーションとはまったく無関係ですが、ひとつは、新任の保育士紹介などで「〇〇先生」と書いてしまっている園、クラスが少なからずあります。これは、大変な非常識

です。自分の組織に属する人には絶対、敬称をつけたい。園長であっても呼び捨てにする。これは、企業などで働いていれば当然のことです。保護者は「なにこれ、非常識！」と思うだけで、何も言っただけでいいです。電話でも、「〇〇先生は今、いらっしやいませんか」「園長先生は保護者対応をしよう。」「〇〇は今、席をがいます。」「〇〇は今日、研修で外に出ています」「園長は保護者対応中です」が正しい言い方です。

●子どもの育ちを支え、促す立場の保育者は

一年間の抱負を

さらに、4月の園だよりやクラスだよりでは、保育者の抱負を書くことがよくあります。

「子どもたちと一緒に一年間、楽しく遊んでいきます」「子どもたちと一緒に成長していきたいと思います」「保育の専門職」としては失格です。保育者が「楽しく過ごす」「子どもと成長する」

と保護者に向かって書くべきではありません。一年間、保育者としてどんな関わりを子どもと持っていたいか、新卒として、中堅として、ベテランとして、園長として、どう取り組んでいくかを書いてください。そうでなければ、「保育士って楽な仕事だね」「その程度なんだ」と言われても反論できません。同じ内容は、3月の園だよりやクラスだよりでも出てきます。「子どもたちと楽しく過ごせました」はまだしも、「つらいこともありましたが、子どもたちの笑顔に癒されました」という文章もあります。もちろん「つらいこともあった」のは事実でしょう。でも、それを保護者に向かって書くのはお門違いです。

文章は、ただ書けば伝わるものではありません。ぜひ書いたものを園内で読み合うなどして、「誤解を生まない」「伝わりやすい」文章を書くスキルを育てていってください。